

郵便配達のおばさんとロクのお話！

昔々あるところに、山がとってもきれいな田舎で郵便を運ぶ一人の美人のおばさんが居ました！

毎日毎日、郵便を配達していました。

おばさんの楽しみは、いろんな家のワンちゃんたちに挨拶したり、おやつをあげたり、頭をなでなでするのがとっても楽しみだったのです。

ある時、ある家のワンちゃんのことがとても気になってきました。

その家では、黒いワンちゃんと、白いワンちゃんがいきました。

黒いワンちゃんは元気いっぱいだったのですが、白いワンちゃんは、日に日に痩せていき、骨と皮だけ、毛並みはボロボロ、歩くのもやっとという状態になってきたのです。

おばさんは考えました。

「病気かな？」

「それとも、お腹に虫がいて、太れなくなったのかな？」

「それとも・・・」飯もらってないのかな？」

おばさんは確かめる事にしました。

そうです！毎日、袋、いっぱいドッグフードを持って、白いワンちゃんにあげる事にしたのです。

毎日毎日、お仕事がお休みの日も、ご飯をあげに行っていました。

ある時、雪の影に食べ残したドッグフードを見つけました。

「あら？誰か他にも、このワンちゃんにご飯をあげている人がいるのかしら？」

ご飯をあげるようになってから三ヶ月程が過ぎたころ、白いワンちゃんは少し肉がついて

来て、元気が出てきました。

「これは、ご飯もらっていなかったのね」と
おばさんは確信しました。

さあ、今日もご飯をあげよう！

と、思ったら白いワンちゃんがいつもの所に
居ません。

ちょっと奥の方に繋がれてしまったのです。

飼い主も側にいました。

ご飯があげられなくなってしまいました。

それから、二週間が過ぎたころ、白いワンち
ゃんが飼われている家に、郵便配達のお仕事
で行きました。

白いワンちゃんは、またまた痩せてきてしま
いました。

おばさんは決心しました。

「このままでは、ワンちゃんが本当の病気にな

ってしまおう。

この家の人に言って、ワンちゃんを譲ってもらおう!」

飼主の人は言いました。

「ロクを譲って欲しい? あらまあ! この犬でいいの? 私はいいのだけど、これ、預かった犬だから、その人に断らないと。」

「はい! わかりました。この子、とつてもなついてくれるので、どうしても譲って欲しいのです。可愛がりますので、お返事お待ちしております。どうかよろしくお願いします。」

おばさんは必死にお願いしました。そして、家の電話番号を書いて、渡してきました。心の中でロクに話しかけました。

「ロク、もうちょっと待っててね。必ずむかえに来るからね。」

夕方、電話がきました。

「元の持ち主も、いいって言うから。」

おばさんはよろこびました。

「はい！今すぐ行きます。」

おばさんは、車に乗り、いそいで、ロクを引き取りにいきました。

「ロクー！」

ロクは自分から車に乗ったのです。

うちに帰って、すぐにロクにご飯をあげました。

ロクはしばらくご飯を食べていなかったでしょう、大急ぎでご飯を食べています。

食べ終わると、おばさんの側にきて、おばさんの手をなめはじめました。そしておばさんの顔を見上げました。

ワンちゃんの目は涙で、いっぱいでした。

ポロポロ、涙をながしています。

おばさんも、泣いてしまいました。

次の日、おばさんはいつものように、郵便配

達のお仕事に出かけました。

ある家に配達に行くと、玄関で待っている人がいました。

「郵便です！」おばさんが手紙を渡すと、その人は、泣きながら、おばさんの手を取ってこういのです。

「ありがとう！本当にありがとう！」

「???.?」

おばさんは、なぜ、お礼を言われたのかわかりませんでした。

「私もあの白い犬が心配で、たまにご飯をあげに行っていたのよ。うちにはもう犬が居るし、引き取る事ができなかったの。でも、これであの犬も可愛がってくれる人ができて、私もうれしくて……」

そう言って、涙をポロポロこぼすのです。

おばさんは思いました。

「そついえば、他にも誰かご飯をあげてるようだったわ……」。

おばさんは、他にもロクの事を心配してくれている人がいた事が、とてもうれしくてなりませんでした。

おばさんは、配達を続けました。そして、また、違う家で、さっきと同じように、お礼を言われました。その家の人も、ロクが気になって、ご飯をあげていたのです。

そして、また、違う家でも・・・。

おばさんは、心がとってもあたたかくなったように感じたまま、今日の仕事がおわりました。

お仕事が終わりに、家に帰ってきたおばさんはロクと遊んでいました。

ご飯をちゃんと食べているので、ロクは元気が出てきたのです。

そこに、一台の車が家の前に止まりました。

女の人が二人、こちらにやってきます。

「ありがとうございます。」

目には涙が浮かんでいます。

「私、この犬の前の飼主です。主人を病気で亡くし、団地に引越しをせざるをえなくなりました。そしてロクを飼えなくなってしまったのです。」

あの家の方には厚意で預かってもらっていたのですが、たまに会いに行くと、ロクがドンどん痩せていきました。預かってもらっている手前、何も言えなくて、陰からこっそりご飯をあげることしかできなかったのです。本当にロクを可愛がってくれる人があらわれて・・・ありがとうございます。」

友達だというもう一人の女の人も泣いていま

す。

「ありがとうございます。私が飼えればよかったけど、団地では飼えなくて……。」

言葉にならず、二人とも泣いています。

そして「ロクにあげてください。」と

大きな袋のドッグフードを手渡されました。

おばさんは言いました。

「ロクは、とっても辛い思いをしたけど、しあわせものですよ。」と配達途中の出来事を話しました。みんなの優しさをいっぱいに受けていたロクの話です。

二人は、声をあげて泣き出しました。

「そうなの……よかったね。おまえよかったね。」

そう言いながら、ロクの頭をなでて、また泣いています。

おばさんは考えました。そして、言いました。
「もう、自分を責めないで下さい。自分のせいで辛い思いをさせてしまったのではないかと、そういうふうには考えないでください。きっと、私とロクが会うための、出来事だったのですから。いつでも、ロクに会いに来てください。」

二人は泣いています。

そして、なごりおしそうに、ふりかえりふりかえり、帰っていきました。

おばさんとロクは、車が小さくなるまで見送りました。

「さあ、ロク…」「飯にしようか？」

「ワン…」